

## 小さな声を聞き取ろうプロジェクト 総合的な学習のひとつの方向性

テレクラスインターナショナル・ジャパン 赤木恭子

キーワード 総合的な学習, 共同学習, バリアフリー, テレビ会議, インターネット

### 1. はじめに

2002年より始まる総合的な学習につながる学習方法について学校の先生方はいろいろ考えられ、一部では実践されているところもある。総合的な学習とは、まず自分の身近なところに目を向け、自分の回りにどんなものがあり、どんなことが起こっているのか認識するところから始まるといっていいたいだろう。しかし、せっかくまとめあげたものをただ同じクラス・学年の仲間に披露するだけではそこからさらに展開し、派生的に生まれるものがあると到底考えられない。父兄、地域の方々への発表会、さらにはいくつかの学校による発表会などを行うことによって生徒たちは達成感を得るとともに、他の意見を聞くことによって自分たちの身の回りを再認識することになる。

「小さな声を聞き取ろう」プロジェクトはこのような自分の身の回りにある「小さな声」を拾い上げ、まとめて国内多地点テレビ会議で全国に発信すると共に、海外相手校との交流を図ることにより、考え方、生活習慣などの違いを理解・認識し自分たちの町が今後どのようになるべきなのか考えるひとつの材料にしようというものである。

### 2. 「小さな声を聞き取ろう」プロジェクトの発足

2000年はミレニアムイヤーということで様々なイベントが企画され実施された。2000年2月29日、テレビ会議を用いて一日かけて世界一周をしようという国際プロジェクト「GLOBAL LEAP2000」が行われた。テレクラスインターナショナル・ジャパンはこれまでテレビ会議を用いた国際交流活動のコーディネータを行ってきた実績より、「GLOBAL LEAP2000」の日本のコーディネータを行うことになった。これに参加した日本の5中学校がテレビ会議のおもしろさに惹かれ「もう一度テレビ会議を行いたい」ということから、今回のプロジェクトが発足した。

テーマの選定においては昨今の福祉に関係する関心の高さにより、「福祉」をとりあげることとし、シンボルを乙武洋匡氏の著書「五体不満足」とすることにした。共通テーマは「乙武さんが私達の町で暮らしているとしたらどうだろうか」を設定することとなった。「小さな声を聞き取ろう」プロジェクトでは、ハンディキャップを持つ人が自分たちの町で暮らすにあたって、どんな便利なこと不便なことがあるのか実際調査し、バリアフリーマップを作成するという目標が打ち立てられたのである。

さらに、このプロジェクトのシンボルである「五体不満足」の著者乙武氏にこのプロジェクトの存在を知ってもらい、できれば最終的に乙武氏にこのプロジェクトの最終報告に立ち会ってもらいたいという参加者の総意をまとめた。

### 3. プロジェクトの流れ

#### 3.1 第一回国内他地点テレビ会議

6月14日に第一回国内他地点テレビ会議を実施した。これに先立ち、参加各校において「障害は不便です。でも不幸ではありません」という乙武氏の著書の一文（ヘレン・ケラーの言葉）に賛成か反対かというアンケートを実施してもらった。テレビ会議の総合司会はテレクラスインターナショナル・ジャパンが行い、各校のアンケート結果と意見発表、各校の海外パートナー希望国、地元での活動計画の紹介、といった内容で進化した。

国内のテレビ会議で日本語で自由に話ができるということで、生徒たちは非常にのびやかに自由に意見を述べ、このプロジェクトの幸先が良いことを予感させてくれた。

#### 3.2 参加各校の海外相手校の選定、交流

第一回国内他地点テレビ会議の結果より、早速海外相手校の選定が行われた。日本参加校と海外相手国を紹介する。

茨城県	取手第一中学校	スウェーデン
兵庫県	八鹿中学校	アメリカフロリダ
熊本県	玉陵中学校	ハワイ
宮崎県	八代中学校	モンゴル
鹿児島県	宮浦中学校	オーストラリア

二学期に入ってから、各学校ではいろいろな行事の合間を縫って地元の調査を行うとともに、宮浦中学校の永留先生が作成してくださった電子掲示板とメールを利用して海外相手校との交流を図った。電子掲示板は写真も貼りつけることができるものであるが、英語がネックとなり、日本側の文章の量が少ないのが現状である。しかし、相手のことをもっと知りたい、自分のことをもっと知りたいという意気込みが周りの先生方、生徒達を引き込み段々と充実したものと

なってきた。

### 3.3 海外相手校とのテレビ会議

掲示板・メールを利用し交流が進んできた時点で、各中学校と海外相手校と1対1のテレビ会議を行った。ここでは、自分たちが調査した地元の福祉の現状を相手校に報告するとともに、相手校との違いを認識し、その相違点を明らかにすることによってさらなる調査の方向性を話しあった。

あらかじめ、電子掲示板で顔と名前を確認していた生徒達は、テレビ会議がつながったとたんに、あの子はどこだろう、あそこにいる、と目を輝かせ遠い国の友達とリアルタイムで話しができることに興奮していた。福祉の問題も大切、でも人と人の繋がりを感じる方がもっと大切と生徒達を感じとれたテレビ会議であった。



### 3.4 第二回国内他地点テレビ会議

各中学校での調査結果、海外相手校とのテレビ会議の様子などをふまえて、第二回国内他地点テレビ会議を行った。国際交流報告と地区での活動報告、各校のアンケート結果と今後の活動（このプロジェクト学習を通して、考え方が変わりましたか）、今後の活動へ向けての宣言文、という内容で進行した。

特に注目すべき点はアンケートにおける調査後の生徒達の考え方の変化であった。調査前は障害を持つ人達に対して「かわいそう」「自分になったらいや」といった否定的な考えの生徒が多かった。調査後は障害を持つ人達も自分たちと同じ人間、人は誰でも皆支えが必要、一緒に暮らすために自分に何が出来るか考えようという肯定的な意見が大半を占めた。また、地元の設備状況の調査を踏まえたうえで、バリアフリーが進んだと聞いて障害を持つ人に「もう大丈夫でしょう」とつきはなしてはダメ、困っている人を見かけたら素直に“May I help you?”と声をかける精神が必要だ、との力強い意見が述べられ感激のひと時を持った。

## 4. プロジェクトを実施していくうえでの問題点

### 4.1 コーディネートするうえでの問題点

今回のプロジェクトでコーディネータを担当したのはテレクラスインターナショナルであった。15年もの間国際交流活動のコーディネートを行ってきたが、今までは1校対1校の交流が中心であった。今回のように一度に5校の相手校の交渉を行い、さらに半年間にも及ぶプロジェクト形式のものをコーディネートしたのは初めてであった。

そのため、海外相手校の交渉、選定に困難を極めた。また、国内での2回のテレビ会議を行うために5校の進捗をある程度揃えておきたかったが、できなかった。このようなプロジェクトを進行するうえでのノウハウの蓄積が必要と実感した。

### 4.2 各中学校で進めるうえでの問題点

一番の問題点は平常の授業との兼ね合いであった。授業中に行える環境を整えられた先生もいたが、課外活動として取り組まれた先生が大半であった。生徒の都合に合わせると何もできない、という現状に悩まれた先生もいた。

もうひとつの問題点は情報技術保有者の確保であった。パソコンの利用技術はある程度あっても、テレビ会議を行ううえでの不安感があり、テレクラスインターナショナル・ジャパンとの相談を重ねるケースもみられた。また、電子掲示板でやりとりされる言語が英語であることも重大なネックとなった。

## 5. まとめ

今回のプロジェクトは最初「テレビ会議は面白い」から入ったものであったが、ただテレビ会議を行うだけでなくプロジェクト方式にしてテーマを明確にし、自分たちで調査、報告したという点が特に注目されるべきものであろう。その過程で海外相手校とのやりとりを通して、障害を持つ人も人間、外国の人も人間という感覚が徐々に磨かれてきたように思われる。プロジェクト発足時に「乙武さんをこのプロジェクトに招こう」というスローガンを打ち立てたが、最近先生方から「障害者という立場でお招きするのは失礼ではないか」という意見も出てきた。生徒達と共に課題に取り組むうちに大人の感覚も変えられてきたという良い事例であろう。

このように、ただ生徒達のためだけの総合的な学習ではなく先生も共に成長できるものが今後どんどん取り組まれるようになることを切に願うものである。